

1. 欧化主義への反発から生じた、日本文化や歴史を外国よりも優秀であるとして、それを守り発展させようとする考え方や風潮。 1
2. 鹿鳴館に象徴される、極端な西洋崇拜からくる欧米文化や制度の模倣・撰取に走る考え方や風潮。 2
3. **BOOK** 三宅雪嶺の主著で、『偽悪醜日本人』と合わせて日本人の美点と欠点を指摘。それぞれの国の国粹主義は世界的意義を有するとした。 3
4. **PERSON** 明治～昭和前期の評論家。金沢出身。明治21(1888)年、政教社を設立し、雑誌『日本人』を刊行。明治政府の欧化主義政策を批判。 4
5. **PERSON** 明治の評論家。欧化主義に反対して明治政府の官僚をやめ、明治22(1889)年、新聞『日本』を創刊。 5
6. **PERSON** 明治の評論家・思想家。日清戦争後の国粹主義高揚期に、井上哲治郎(天皇制に基づく国家主義を主張した哲学者)らとともに「日本主義」を唱える。 6
7. 日清・日露・日独(第一次大戦中)戦争の三連勝を背景とした、さらなる国粹主義の高揚を経て、昭和6(1931)年の満州事変を境に陥った「アジアの解放が日本の使命」と考えるような極端で排他的ナショナリズム。 7
8. **PERSON** 明治の思想家で明六社にも参加。『日本道德論』を著し、儒教道德を回復して西洋思想と折衷させ、前者を後者の土台であるとした。国粹主義の先駆者に位置付けられる。 8
9. 明治23(1890)年発布の日本の教育と国民道德の基本原則。皇室中心の忠と孝(天皇の臣民・赤子<せきし>につながる)をメインに、西洋のモラル(市民的責任感)も徳目に加えつつ、忠君愛国を教育の目的とした。 9
10. **PERSON** 明治・大正の近代文学の代表的作家。文学史上では反自然主義の高踏派・余裕派。英に留学。東大退職後は、「在野の人」に。前近代的伝統や価値観とのせめぎ合いを通して、近代的自我の確立を模索した。代表作は、前期三部作の『三四郎』『それから』『門』後期の『彼岸過迄(ひがんすぎまで)』『行人』『こころ』など。 10
11. 夏目漱石が講演「私の個人主義」で説いた、内発的開化の前提となる(日本人の)自分としての主体性確立の考え方。他者の自己も尊重し、決してエゴイズム(利己主義)ではない。理想主義・個人主義的。 11
12. 夏目漱石が晩年に到達した境地で、小さな「私」利を去って、「天」(宇宙・自然の普遍的な大我)に則して生きること。自己本位の到達点である。 12
13. **PERSON** 明治・大正の近代文学の代表的作家。文学史上では反自然主義の高踏派・余裕派。陸軍軍医総監としてのエリート国家官僚。ドイツに留学。漱石と同様、前近代的伝統や価値観とのせめぎ合いを通して、近代的自我の確立を模索。代表作は、『舞姫』『高瀬舟』など。現実主義・集団主義的。 13
14. 森鷗外が重要視した、個人と社会の狭間で自己の立場を受け入れる「諦め」の精神。個人的自由と社会的責務の葛藤において、後者をより大切に。 14
15. 森鷗外が、史実に忠実ながらも歴史そのままではないフィクションを交えて著した小説群。前近代的な封建的束縛の中でこそ、内面的自由や意地を発揮して人間的に生きた武士や庶民を描いた。 15
16. 文芸雑誌「白樺」で活躍した、大正の人道主義・理想主義作家グループ。武者小路実篤(むしゃのこうじさねあつ)や有島武郎(ありしまたけお)、志賀直哉など。 16

T. Q. 「漱石と鷗外の共通点と相違点とは？」

T. A.

夏目漱石と森鷗外は、ともに海外留学を経験したが、漱石は在野の人となり、外的な文明開化を批判して、日本人の自分としての主体性を確立するという意味での「自己本位」や個人主義を主張した。それに対して鷗外は、政府(陸軍)の高官として体制側に立ちつつ、東洋と西洋の両文明をふまえた「二本足の学者」として活躍した。両者の目指すところは、近代的自我を打ち立てることでは一致していた。